

平成 29 年一級建築士試験合格発表とともに、JAEIC(センター)から各種データと標準解答例が 2 例発表された。ここでデータおよび標準解答例等の気づいた点について述べることにする。

---

## データから読み取れること

---

- (1) 前年 28 年の学科合格率 16.1%、製図合格率 42.4%、合格者数 3673 人に対し、29 年は学科合格率 18.4%、製図合格率 37.7%、合格者数 3365 人となっており、学科合格率はやや増加しているが、製図合格率および合格者数はやや減少している。
- (2) 類別パーセンテージを見ると、Ⅰ類 37.7%、Ⅱ類 21.2%、Ⅲ類 29.9%、Ⅳ類 11.2%となっており、前年の 28 年（Ⅰ類 42.4%、Ⅱ類 27.1%、Ⅲ類 20.7%、Ⅳ類 9.7%）に比べ、Ⅲ類、Ⅳ類が増加し、Ⅰ類、Ⅱ類が減少し、Ⅰ＋Ⅱ＝全体の約 6 割となっている。これは図面採点による一次合格者が 7 割程度であった平成 22～28 年の傾向とは異なった印象となっている。

---

## 標準解答例 2 例の特徴

---

- (1) 発表された標準解答例 2 例についてまず注目されるのは、指定面積範囲（2400～2800㎡）に対し、解答例①は 2559.0㎡で中間値をやや下回り、②は 2739.8㎡で上限に近づいている。

平成 21 年以降の傾向としては、中間値または上限に近くなる標準解答例が多く、指定面積のある要求室の配置自由度を確保するためリゾートホテル用途としての平均的定数を確保する必要から、再現図添削においては上限に近い案が多数を占めた。そこからセンターの標準解答例①が中間値以下であるのは、指定範囲の妥当性を示すための意図と考えられる。

- (2) 今年の特徴として、(注 1)「高齢者、障害者等の移動等の円滑化の促進に関する法律」に規定する特別特定建築物の計画、(注 2)パッシブデザインを積極的に取り入れた建築物の計画、(注 3)斜面地を考慮した建築物の計画、(注 4)車両動線(車回し、車寄せ等)を考慮した外部空間の計画が事前に公表されていたことと、問題文の文字数が 28 年以上に多く、それらに対応した引き出し補足説明、矢印、什器等の記入が丹念にされている。ただし、機械室内部の機器更新に配慮した各機械スペースについては記入が無かった。
- (3) その他の施設等の駐車場について、車椅子利用者用、サービス車の各 2 台は主出入口に対し解答例①②ともに北側の車回しをはさんで東西配置となっており、南側にリラクゼーションスペースと湖辺へのアクセスがある。
- (4) 防火区画については、②において吹抜けにより 3 層がつながっているが、避難用の階段についてはドア表記があるものの、吹抜けに面する開口部にシャッター表記がない。これも軽微な減点で済まされたか、減点対象ではなかったものと考えられる。
- (5) スパン割りにについては、客室に間口指定があったため、①は 8m × 7m の単一グリッド、②は 8m × 7m と 8m × 8m の混合グリッドによる構成となっており、一級とるぞ！.Net の再現図の添削でも多くの受験者が 8m × 6m または 8m × 7m のグリッドを採用していた。
- (6) 要求室欄の下部に記載のあったゴミ保管庫は 2 案ともに内部配置となっていることから、建物の外部独立配置とした場合は若干の減点があったものと考えられる。

- (7) 構造的特徴：斜面地における地下 1 階部分は北側土圧壁が実質上の耐力壁となることから、南面には景観への影響が少ない K 型ブレースなどの配置、1 階部分で地下 1 階に対しせり出したグリッドへの下部に袖壁配置等が予想されたが、標準解答例における補足説明は基礎の種類に留まっている。従ってこれを補う意味で記述において触れる必要があったものと考えられる。
- (8) 設備的特徴：記述における設問は 1 問のみであったが、空調機械室、電気室、機械室が独立した要求室として指示され、後者 2 室は面積指定、階指定がなされた。その他、留意事項で空調方式の指定、計画分野では設備に関連する「太陽熱、井水、地中熱等」が指示されたため、図面と記述を合せた設備の配点は、構造配点に比べ全体的には決して少なくなかったものと推察される。

---

## 分野ごとの難易度

---

- (1) 平成 29 年は 28 年と異なり、計画分野の自由度がやや低く、定数がやや少なめだったこと、3 平面構成であったこと、問題文に対応した記入事項が多岐に渡ったことなどから時間的制約上困難な面が見られた。
- (2) 構造分野は事前公表された注 2、注 3 への対応により、図面における記入負荷が高まり、記述においても斜面地を前提とした 3 問が問われたことから、28 年と同様構造分野の高難度化を印象づける内容となっていた。
- (3) 設備分野は、注 2 のパッシブデザインおよび留意事項の「太陽熱、井水、地中熱等」の利用指示により、自然エネルギーをどのような設備機器を用いて取り込むかを各受験者が図面において提示する必要があり、施設全体をダクト併用ファンコイルユニット方式と指定され、記述においてはダクトルートの計画において空調機械室およびダクトスペースの配置について高難度要素が組み込まれていた。
- (4) (1)～(3) による傾向から 3 分野の難易度はそれぞれに高く均衡しているが、記述は計画分野 3 問、構造分野 3 問、設備分野は 1 問であることから、記述配点は設備分野よりも構造分野に重点配分されたものと考えられる。

標準解答例 2 例の特徴 (8) 設備的特徴と合せ、問題文の文字数増加による未完成Ⅳ類の増加が、データから読み取れること (2) の  $I + II = \text{約 } 6 \text{ 割}$  となった主要因と思われる。